
IS&It;インフィニットストラトス> ~ 奇跡の軌跡 ~

焔の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニットストラトス〜奇跡の軌跡〜

【Nコード】

N4594Z

【作者名】

焰の錬金術師ラビ

【あらすじ】

IS学園、女性しかいないはずのその学園に俺達3人は・・・
『生徒』および「操縦者」としてこの学園に
入学している、奇跡が導いた軌跡。

ISの二次作小説。

序章の序章

IS、正式名称は『インフィニットストラトス』

女性のみ動かすことの出来るマルチフォームスーツ

このISが発表されてから俺達『男』の地位は酷いことになった。
女尊男否もいいところだ。

近くを通りがかった男を女性が小間使いのようにするのは

もはや見慣れている。

もともとISにだって適性くらいあるのにな、まったく・・・。

ちなみに世界規定で軍に使われることはない。

使った場合は罰せられる、まあ戦車も何も通用しないのだから当たり前前。

で、そのIS操縦者を育成する機関が唯一日本で一つだけある。

それがここ、IS学園だ。

生徒から教師まで全員女、そして今年も、その未来の操縦者達が
教室の席についていた。

『俺達』三人を除いては・・・

序章の序章（後書き）

前回のリメイクですwww

ちよつと設定も変えたんでもひとつヨロシク

（ ・ ・ ）
（ ・ ・ ）

登場キャラクター & 搭乗IS紹介

まずはキャラ紹介っしょ!?

蒼神 恭あおがみ きょうじ

いつもヘラヘラしており、笑いを絶やすことがない、簡単に書けばただのバカ

小さいときのトラウマであまり人を嫌おうとはしない。

バカの上になりのお人好しで、一人ぼっちの奴などを見ると自分達の輪に入れたがる。

だが、嫌いなものはとことん嫌っており、もしそれを行うものがあるのなら全力でつぶしにかかる、口癖は『壊す』

眼が悪くコンタクトをしている、左目は生まれつき赤く、

黒いカラーコンタクト(ちゃんと度が入っている)をしていて、赤い眼の状態だと一転し性格ががらりと変わる。

赤い眼の状態の正確は

笑うことはなく、ただ冷酷に相手を言葉で追い詰める

自分が認めた人間以外の人間は物のように扱う。

寮や自室では眼鏡をかけている。(カラーコンタクトは度がないものに付け替える)

専用IS『ブラッドデステイニ-く血の運命』

咲神 さきがみ
拓樹 ひろき

蒼神とは中学校3年生からの悪友、蒼神から呼ばれている愛称は『
ロキ』

常時テンションが高くちょっと下ネタな発言をする。

だが、周りからの受けはよく、場を盛り上げたりする。

蒼神の赤い眼のことを唯一知っている人物でもあり
相談に乗っている人物でもある。

基本的に思い悩むことはないが悩むときは悩む。

よく蒼神のブレーキ役にもなってくれる。

咲神も蒼神同様、眼が悪く、寮や自室では黒ぶち眼鏡をかけている。
もちろん学園ではコンタクト。

専用IS『エンジェルジャスティス<天使の正義>』

ブラッドデスティニー<血の運命>第4世代

機体のメインカラーは赤と蒼、

メイン武装は後付武装についている二つの刀、『血祭』『如月』

そして、腕付装備に付属している二丁拳銃、『ブラッド』
拡張領域が普通のISよりも広く、このほかにも武装は
狙撃ライフル『デッドスター』そして極めつけは
後部に位置する二つの翼、『デステイニー』
ワンオフ・アビリティー『ブルーデステイニー<蒼い運命>』
と、多彩な武装がある。

血祭：刀身は紅く、まるで血のような色をしている。このISのメ
イン武装

如月：刀身は蒼く、深海のような吸い込まれそうな蒼色をしている、
このISのメイン武装

二丁拳銃ブラッド：腕のアームの上部に付属しており、いざという
ときに

抜き取って実弾を放つ、実弾以外にも

エネルギー弾も放つことが出来る、主に牽制と
して使うことが多い。

銃身は黒に赤を交えた色、この銃身で相手の接
近平気を

受け止めることもでき、カウンターとしても使
える

このISのサブ武装

狙撃ライフル『デッドスター』：セシリアのスターライトMK?と
同様の射撃が出来る、銃身は紅い。

デステイニー：ブラッドデステイニーの特徴とも言える、背中に位
置する

翼の形状をしたフィンパーツである、フィンパーツ
は6枚、

ブルーティアーズと似ていて操縦者が指令を送り動かす。

翼の一枚一枚がフィンパーツなので翼の総数は6
能力はブルーティアーズと同じでフィンパーツから
ビームを放つ。

色は一番上のカラーが紅い、残りは蒼い、普段は蒼
の4枚を

放つが非常時にのみ紅いデステイニーを放つ。
基本能力はブルーティアーズと同じ。

ブルーデステイニー<蒼い運命>

ブラッドデステイニーのワンオフ・アビリティーで、全身を蒼い粒子が覆う、

自らのシールドエネルギー専用のシールドを展開させる。
だが、使用者の体力を極端に消費するため連発は出来ない、
使用中は蒼い粒子がシールド効果をしていると同時に機体の
攻撃、スピードが上昇する。

エンジェルジャスティス<天使の正義>第4世代

ブラッドデステイニーの兄弟機

機体カラーは白、白式とカラーは同じだが造りは違う

メイン武装は腰付装備の刀型装備『ホープ』

そして逆サイドについているハンドマグナム『ライフ』

後付装備の翼、『エンジェル』、そして、腕付装備から発生できる

エネルギークロウ、『ユニコーン』

拡張領域は普通のISと同じで容量は残っているので
武装をインストール可能。

ワンオフ・アビリティーは『ジャスティス<正義>』

ホープ：エンジェルジャスティスの腰についている剣、刀身は純白

ライフ：銃身は灰色、エネルギーと実弾を撃つことが可能、

エネルギーの場合は破壊力がすさまじく、反動で本人も少し
後ろに

ぶれる、実弾の場合は普通の実弾へ行きと同様の威力。

ユニコーン：腕のアームパーツの手の甲からかけてのびる3本の爪、

両腕から発生されるので合計6本、蒼い澄み切ったエ
ネルギーが

相手を切り裂く、主に緊急時の回避や接近戦のときに
使う。

ホープとは両立できないのでホープの時は大体使えな
い。

エンジェル：兄弟機のブラッドデスティニーのデスティニーと同様
の後部装備

形状は天使の翼を機械化したような姿でデスティニー

とは違い

翼からエネルギーを散弾のように撒き散らす、1対複
数のときに使う。

ジャスティス<正義>

エンジェルジャスティスのワンオアフ・アビリティー
ブラッドデスティニーとはその効果は大きく違い、
一定時全ての装備が収納される。それと引き換えに絶大なスピード
を得る
発動時に出せる武装は一つだけ、毎回パターンは違うが
主にユニコーンを使うことが多い、そして、最大の特徴が
発動時に収納されたときエンジェルも同様に収納されるが
それと引き換えにエネルギー状の光の翼が発動期間中に現れる。
絶大なスピードを特徴とした攻撃を行う。
兄弟機であるブラッドデスティニーと同様シールドエネルギーの変
わりに
使用者の体力を極端に消耗する。

紅くれない 瑠璃るり

男が学園に入学した、だから彼ら専用のISを作ってくれ、
そう束にお願いされてブラッドデスティニーとエンジェルジャステ
イスを作った科学者。
人間嫌いの束とも面識があり幼少期からの知り合いで、科学者希望
の彼女に
束は自分の技術を極秘で少し教えていた。のこりは独学で成功をと
げ2機のISを作り上げる。
IS学園の生徒の一人として在籍している

開発結果上、製作者は篠ノ之 束、ということになっているが
それ自体は束に頼んでもらったこと、実際、実力は束も認めて

いる。

ある出来事により蒼神に好意を抱くが本人は気付いていない。

専用IS無し

蒼井 桜

瑠璃とは幼なじみ。

ブラッドデスティニーとエンジェルジャスティスを瑠璃とともに開発した。

瑠璃と同じく束と面識があり束は幼少期の彼女によくコスプレなどをさせていた。

束がISを発表して行方をくらましている間もちよくちよく色々な方法で

監視を潜り抜けたサーバでメールなどをしていた。

現在は瑠璃と同様IS学園に生徒として在学している。

とある出来事により咲神に好意を抱くが蒼神同様まったく気付いてもらえない。

専用ISなし

登場キャラクター&搭乗IS紹介(後書き)

異常です!!っあ、間違えた以上です!!

つかれたなあ・・・また変更などがあったら活動報告に書き込みしまーす

第1話 クラスメイトは全員女子!?

「……です、よろしくお願いします」

と、出席番号の前のほうの人が挨拶をした、それを俺、蒼神 恭はただ見つめていた、そして慌てて視線を手元の本に戻す。

なぜ戻したかつて？

えーっとだな、まずは基本的なことを話そう。

IS、正式な名称は『インフィニットストラトス』

宇宙空間での活動を想定され作られたマルチフォームスーツ
だけど製作者の考えた宇宙への傾向は全くなく、結果

このISは兵器として着目された。だが、それもまたスルーして今
現在はIS

を着用して『スポーツ』とした競技になって落ち着いている。

だが、このISの絶対的な特徴の一つは……いや、欠陥かな？

『男』は絶対に扱えないんだわ、理由は知らんが普通は起動しない
のだ。

で、そのISのパイロットつてのを教育する機関がここ、IS学園
3年間寮で過ごす、んでもってやっぱり全員女の子だけ。

そーこーで! 『俺』いや『俺達』の登場だ。

いや、理由こそ不明だが、俺はロキと共に受験会場を間違えてしま
って

そこで偶然ISを見つけた。

俺達はそれに何気なく、ただの興味本位で触つてみたのだ。

『ほんとうに男は扱えないのかな？』と……。

そして、俺はそのISに触った、恐らく試験用の機体だったのだろ
う。機しかなかった

そのISのうち、俺は真ん中を、ロキは右側のを触った。

すると、頭の中に今まで一切なかったはずのISに対する知識が流
れ込んできたのだ。

こいつの使い方、何のためにあるのか、そして、気がつく

それは俺の体の一部となっていた、腕のアーマーが一瞬俺とくっつ
いたと

思ったらその感覚はもはや自分の体の一部のように感覚がリンクし
た。

そして肌を何かが覆うような感じがした……皮膜装甲展開……
完了

いきなり体が軽くなった無重力間……推進機正常作動……確認
全てを見透かすような感覚が俺の目の前に現れる……ハイパーセ
ンサー最適化……終了

今まで一切係わり合いのなかったISの全てが、いや具体的に言えば
全くなのだろうが、今こいつの情報は、一気に流れ、一気に理解し
た。

で、それをISの試験管が見つけて体をあちこち調べられたあげく
IS学園に強制入学、そこで俺達と同じ境遇の織斑 一夏と出会っ
た。

え？なんの学校の入学試験だったかって？

藍越学園っていうの、就職率がいいって有名でさ。

一夏も俺達と同じく名前を間違えてISを起動させたという。
似たもの同士っていいね。

つと、言うことがありましたとさー、はい、俺の過去の回想シーン
終了

まあ最初に戻るけどクラス中女の子だらけっつーか俺達3人以外の
全校生徒は

女の子なのだ、で、その中の一人をじつと見つめている？

アホか、どんな噂が立つのやら……。

などと考えていると、目の前に涙目の眼鏡をかけた先生がいた。

えっと……たしか名前は山田真耶^{やまたまや}……だっけ？

そういえばさつきものすごい音がしてたな、一夏が頭抑えてるけど
いったい……。

<パアアアアン>

「つてえ！」

俺は後ろからの襲撃に頭を抑えた。

「つてえな……誰？」

そこには山田先生とは対極的な、まあぶっちゃけ見た目から

怖そうな人が立っていた、胸の名札に織斑 千冬と書かれている。

もしかして自己紹介？

俺はそう思い立ちあがった、山田先生は、ほう、とした表情になり

織斑先生は「まったく、山田君が何回呼んでも無視するとは……」

と、とんでもないことを口にした。

え？俺ってそんなに呼ばれてた？なら自己紹介いらなくね？

とは口が避けても言えず、俺は周りを見て

「えーっと、蒼神 恭です・・・」

ええいやめろ！その『もつと言つてください！』見たいな目線は！
恐らく一夏もこれにあつたのだろう。なにやら同情の視線を感じる。

後ろには出席簿をもつたターミネーターもいる・・・。

ここは腹を括って・・・

「えーっと・・・とくにこれ以上はないです」

そういつて席に座った。

とたんにくガタガタガタ>と、ものすごい音がしたので俺はちらりと振り返った。

見ると数名の女子がこけていた、なんだ？

と、そんな具合でロキもターミネーターの一撃を喰らって自己紹介をした。

「い、一夏あゝ」

俺は休み時間になってポロポロになった制服を直しながら一夏のところに行く

いままでこんなに男がいてくれて嬉しいと思つたことはない！

と、心で大喝采をしながら一夏の席を見る。

するとそこには、篠ノ之 篤と名乗っていた女の子だった。

なにやら話している、っあ、出て行った・・・。

ロキはロキで今廊下を全力で逃げてたし。

「やることねえな……」

周りからは『誰が最初に話す!?!』というような視線を感じて落ち着かない、かといって移動してもやることがない。

はぁ、とため息をつく、いきなり

「ちよつとよろしくて?」

と、声をかけられた……。

第1話 クラスメイトは全員女子！？（後書き）

っ
つてことでもリメイク版！更新していくからどんどん見てちょ！

代表候補生

「ちよつとよろしくて？」

と、俺は背後から声をかけられた。

「はい？」

と、俺は机に突っ伏した状態で首だけを声のほうに向けた。

そこには、仁王立ち……っていうのかな？

そんな立ち方をした美少女がいた。

髪は地毛の金髪だろう、とても鮮やかだ。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつりあがった状態で俺を見ている。

「え……つと、何か用かな？」

俺はとりあえず愛想笑いを試みる、が、なぜかその子は怒っていた。

「な、なんと、わたくしに声をかけてもらったというのにその態度ですの!？」

……わっつけわかんね、ああ、ちなみに補足事項としてだがこのIS学園は多国籍なので外人さんなんてたくさんいるよ。つーかウチのクラス3分の1しか日本女子がいないしな。

「えーつと、まあ……だれ？」

俺の頭の中はなぜこの子が話しかけたのかと自己紹介の出席簿アタックだけ、残りは空っぽ、それすなわち！

まだクラスの子の名前はほとんど覚えてない！

が、どうやら俺の発言は火に油を注いだようだ。

金髪の子は顔を赤くし

「な、ななな！なんと、イギリスの代表候補生であるこのセシリア・オルコットを

「ご存じないと！？、自己紹介をしましたのに記憶していないと！？」

ずい、と、顔を近づけるセシリア、んー・・・怒ってるね。

と、そこで俺は疑問がわいたので

「ああ、そうだったな、セシリアだセシリア、それで一つ聞いていいか？」

と、笑いながら相手の出方を見る。

「今思いつきり私の怒りをスルーしましたわね、まあいいですわ、庶民の

要望にこたえるのも貴族の務め、どうぞ？」

「代表候補生ってなんスか？」

<ガタガタガタガター・・・>

クラスの大半がずっこけた、どうした？集団でバナナの皮でも踏んだか？

「な・・・ホントに何も知らないのですね・・・

代表候補生とは国の代表ともなるエリート中のエリートですの

「ほお

「ですからそんなエリートに声をかけられたらまずは感動するはずじゃなくて？」

「どうだ、とセシリアは偉そうに胸を張る。

「……あ、理解した、この人『現代女子』だわ。

ISが発表されてから男の地位はボロボロになった。

『女』偉い』の構図になり、待ちゆく女は男をパシリにするなんてものは

しょっちゅうみる、まあでも大体の人は俺達男をちゃんとまあ

対等にしてくれるけど、逆にその構図を権力のように振りかざすのも嫌なことだが存在するわけで、その中の一人か……。

「めんどくせ」

俺はつい、ぼそりと呟いていた。

しかも、最悪なことにセシリアはそれを聞いていた。

「め、めんどくさいですって！？それがわたくしに声をかけられた人の台詞ですか！？」

と、逆に俺に火に油を注いだ形になって

俺も思わず言い返してしまう。

「それがめんどくせえんだよ、エリートだなんだってよ、何様だ？」

俺は目を細めセシリアを睨みつける。

。周りの女の子達がざわつく、ああー、今の俺は見ないで欲しい……。

「な……何様ですって？ふふ、いうじゃないのですの？」

「喧嘩なら買っぜ？権力無しの真っ向勝負ならな」

と、互いの視線がバチバチと散っていたとき。

「っあ、蒼神く、一夏が呼んでるぜ？」

と、ロキがクラスに入ってきた。

そして、女の子はロキに詰め寄る。

俺も怒りが空回りして

「・・・まあいいや、一夏どこ？」

とロキに向かった、女の子達が道を作る、・・・？

「もしかして・・・みんな怖かった？」

と、俺は冗談混じりに回りに聞いてみる、すると。

「怖かったもなにも、あんなに代表候補生に言い返す人始めてみた」

「うんうん、って言うかよく言い返せたよね」

「逆に惚れちゃいそうだった」

と、なにやらそっちの話題で騒ぎ始めていた。

「ん？何があったの？」

ロキは何がなにやら、とわからない状態だった。

「気にすんな、行くぞ」

俺はロキの首をつかみ一夏のもとに行った。

屋上のフェンスに一夏は寄りかかっていた。

「一夏？自殺志願？」

「ちげえよ！」

こちらに歩み寄りながら突っ込みを入れる。

一夏は俺の目の前に立ち、缶ジュースを渡してきた。

「？」

「やるよ、飲んでみな」

「んじゃいただきまーす」

俺は「やるよ」といわれてすぐにプルたぶを開けて
ジュースを飲んだ……ってえ!!!

「辛!!!何これ!？」

「引っかかったぜ、咲神」

「だろ?こいつよく引っかかるんだよ」

「何だよこれ!!!」

「咲神、織斑特製、唐辛子ジュース!」

「殺す気か!!!」

俺は一気飲みしてしまい喉がひりひりしていた状態で
突っ込みを入れた、っつーか涙出てきた、マジ痛い……喉が。

「いやあー、これ最初は咲神に試したんだけどぶっ倒れてさ」

「んで、今度は蒼神にやろうぜって俺が提案したのさ」

「イジメか?」

俺はロキもこれをのんでぶっ倒れる創造をして笑う。
そしてきがつく、アレ?じゃあ……

「一夏は飲んでねえな?」

俺はにやりと口元を歪め、ロキに手で命令をする。
ロキはコクリと頷き一夏を羽交い絞めにする

「え!?!いや、俺は仕掛け人だからノーカンだろ!？」

「ねえな」

「ないよ」

俺、ロキの順番で否定、俺は一夏の口を強引に開け。

「地獄見てろ」

一気に唐辛子ジュースを流し込んだ。

休み時間終了のチャイムと、一夏の断末魔が同時に聞こえた。

「さて、これからクラス代表を決めたいのだが……そのバカ3人はどうした？」

織斑先生こと千冬さんが俺達を睨みながら一声、

俺達3人とは、一夏、俺、ロキだ。

みんな口を押さえてうずくまっていたのだからしょうがない。

「ぜ、ぜんぜえ、ぎにじないでください」

俺はひりひりする喉を抑えながら氷を食べる、もちろんばれないように。

千冬さんは首をかしげて

「またどうせバカをやったのだろっ、話を続けるぞ」と、話しに戻った。

「クラス代表は誰がいいか……誰か、立候補はあるか？」

と、千冬はぐるりとクラス中を見る、すると。

「はい、蒼神くんを推薦します！」

「っあ、私も」

「私も私も！」

と、なぜか俺に投票が殺到した、なぜ!?

一夏やロキもいるだろう!?!と、突っ込みたいのだが喉が痛くて声が出ない。ちくしょう……(泣)

と、まあ当然それに反発する人物はあらわれる。

「ちょっとお待ちになって！」

っあ、やっぱりこの人だ。

「どうして男がクラス代表をするのですか!?!理解できません！」

「ぞれいぜんにげっでいしではせん」

俺は喉がガラガラ状態でかく否定する、ようやくすると

『それ以前に決定してません』です。

「それにワザワザこんな所まで着て男が一緒のクラスというのだけでも

いい恥だというのに、代表まで男なんて……このクラスの質が落ちますわ！」

「がほっ!あー、ならセシリアがやれば?代表」

俺は喉がようやく回復し、まともな反論をだす。

「別に俺はやりたくねえし、譲るぜ?」

と、俺はセシリアに眼だけを向けて話す

ロキと一夏は『我関せず』と、眼を合わせない、テメエ等……。

「ゆ、譲るですって！？わたくしをバカにするのもいい加減にしないさい！」

「いや、お前がいい加減にしろ、何様ダツツの、ここじゃお前は一生徒だ、俺も含めてな、

なーーらよ？気にいらねえなら、どうでもいい理屈ごねるんじゃないくて

「真っ向勝負じゃね？」

俺は言い切った後にしまった！と思った、だって俺ISの稼働なんてそんなに
してねえぞ！？わあー！俺のバカ！バカバカ！

と、後悔に落ちていると、セシリアは一瞬驚いたような顔になり、
すぐに顔を引き締めて

「いいですわ・・・決闘です！」

「あゝやっぱり？」

俺は苦笑いをしてセシリアに眼を向ける

セシリアは真剣な顔になり

「私の努力の結果・・・わたくしのブルー・ティアーズで見せて差し上げますわ！」

「ブルー・ティアーズ？」

俺は首をかしげてセシリアは

「わたくしの専用機ですわ」

と答えた、ああ、専用機ね、専用機・・・ってえ！？

「専用機！？専用機持ちなの！？」

俺は目を輝かせてセシリアに聞いた、セシリアはいきなり

態度が変わって戸惑ったものの余裕の表情に戻り

「え、ええそうですね」

と、答えてくれた。

「すつげえー、やべえマジ尊敬する、そこだけは」

と、そこまで言ったところで

<すばああああん>

「つーーーーー!!!」

「授業中だ馬鹿者」

「すみません！」

俺は席について頭を抑える。

結局クラス代表は俺かセシリアかになり、HRが終わり寮に戻ろうか
と思ったところで、セシリアが

「ちよつとよろしくて？」

と、また声をかけてきた

「ん？」

俺はセシリアのほうに向き直り

彼女は口を開いた

「さ、先ほどの尊敬する・・・とは？」

と、少し小さく言葉を放った。

もしかして気を悪くしたのかな？

そう思った俺は

「気を悪くしたなら謝る、ごめん」

と、頭を下げた、セシリアは

「い、いえ！そういうことじゃなくて・・・」

「ああ、意味？そのまんまさ、専用機なんて誰もが持てるわけじゃねえじゃん？

それを持つてるって事は相当の努力とかしたんだろっつなあって、だから

その部分は俺は尊敬するよ、ってか俺には出来ネエし」

「そ、それなら・・・」

「いや、もしかしたらそれだからかな？」

「え？」

「いや、セシリアが男嫌いなもの、もしかして努力とかしまくって外を知らなかったからとか、それならしゃーないよ」

俺は笑いながら手を振る

「つま、尊敬することにはするし、そういう理由があってあんな態度だしたら

俺が怒るってのは・・・まあおかしいし」

「い、いえ・・・わたくしは・・・」

「だけど、だからといって手は抜くなよ？」

「え？」

「決闘だよ、どうせなら正々堂々真っ向から勝負しようじゃん」

俺は笑いながら教室を出た、そこでまた

「あ、蒼神さん」

「ん？」

「さ、先ほどはわたくしも態度が過ぎました、もうしわけありません」

と、頭を下げてきた

俺はその頭に軽くチョップして

「間違いなんて誰でもするよ、んじゃ」

俺はそういつて教室を後にした。

それから自室に戻り頭を抱えて思った。

やべえ・・・さっきの会話もろ俺キザな男じゃん・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594z/>

IS<インフィニットストラトス> ~ 奇跡の軌跡 ~

2011年12月17日10時59分発行